

メンフィス・ネクロポリスの遺跡管理の現状

高橋 寿光*

1. はじめに

エジプトにおいて遺跡管理の考え方が一般的になり始めたのは、2000年以降といっても過言ではないだろう。2000年3月28日から4月3日の期間で、カイロで開催された4年に一度の国際エジプト学会議の討論会では、「遺跡の管理と保存」がテーマに選ばれ、SCA長官のザヒ・ハワス博士の発表は大きな影響力を持った(Hawass 2003)。これ以降、エジプト考古学の分野では、「遺跡管理」の用語を耳にする機会が各段に増え、エジプト各地の遺跡において遺跡管理の取り組みが始まっている。ここでは今後の遺跡整備計画の策定に向けて、メンフィス・ネクロポリスにおける事例を幾つかを取り上げ、近年の動向について概観してみたい。

2. ギザ台地

(1) 1988-2001年の保存管理計画

ギザ台地は、SCA長官であるザヒ・ハワス博士により提案された「ギザ台地保存管理計画」によって、エジプト国内で始めて保存管理計画が発表され、実行された遺跡である(Evans and Fielding 1998; Center for Documentation of Cultural and Natural Heritage 2001: 80-87; Shetawy and El Khateeb 2009)。この計画は第1期～第4期までの段階的な工程で進められ、1988年に第1期を開始し、現在は第4期が進行中である(Hawass 1995, 2002, 2003, 2008; Leblanc 2003; Mayer 2003; Weeks 2003)¹⁾。

①第1期

第1期は、遺跡の組織化・インフラ整備のフェーズとして、観光客と車の動線とアクセスの整備、ピラミッド本体とスフィンクスの保存修復プログラム、人員の配置と研修が主な項目となった。

その結果として、ギザ台地への入口ゲートの建設、遺跡見学者からの入場料の徴収、車の入場料徴収による車の制限、大ピラミッド入場の特別料の徴収による入場者数の制限が実施された。ピラミッド本体とスフィンクスについては、スフィンクスの修復、スフィンクスの保存に関する国際シンポジウムの開催、大ピラミッドおよび第2ピラミッドの修復(クリーニング、強化処置)、大ピラミッド内部に換気装置および監視カメラの設置が実施された。人員の配置と研修の計画の一環としては、エジプト人査察官の考古学および保存科学の研修、遺跡清掃員の配置が行われた。さらに、ナズレット・アル＝サマーン村(Nazlet al-Samman)などギザ台地に隣接する村の問題については、新たな建築活動の禁止、新たな建設はファイユーム・ロードに位置する新ナズレット・アル＝サマーン村で許可、下水システムの導入などの行政処置がとられた。

②第2期

第2期は、ギザ台地のより包括的で分かり易い一般公開を目的として計画され、観光客の三大ピラミッド

* 早稲田大学エジプト学研究所研究助手

への集中を回避し、特の遺跡への負荷を軽減する効果が期待された。その結果として、大ピラミッドの東側と王妃のピラミッドのクリーニングおよび保存修復処置、木製の歩道や照明、階段なども設置され一般に公開された。

③第3期

第3期は、3大ピラミッドの保存計画を明確にし、観光マネジメントを含むマスタープランを策定することに力が注がれた。1991年にSCAはユネスコに協力を要請し、これを受けてイギリス人の専門家が派遣され、1992年には、The Masterplan for the Giza Plateauが策定された(Mabbitt 1992)。このマスタープランでは、ギザ台地を取り巻く環状道路の建設と遺跡内での電気自動車による移動、考古学的情報と観光客のための施設を備えた社会教育施設を2箇所を設置、馬と駱駝の家畜小屋のギザ台地の南側への移動、遺跡の南にピクニック・レクリエーションエリアの建設、考古事務所と保存修復ラボの建設などの計画が盛り込まれた。

④第4期

第4期は、ギザ台地全体の遺跡のさらなる考古学的研究と保存修復のフェーズとして最低10年から15年を要する計画で、主要項目としては以下が掲げられた。

- ・クフ王のピラミッド東側と南側、カフラー王参道脇、西墓地、東墓地のmastaba墓の発掘・再発掘、修復。これには、設備された保存修復ラボと訓練を受けた人員が必要である。
- ・メンカウラー王のピラミッド近隣の調査（南側と西側エリアの発掘）、花崗岩製の化粧石と衛星ピラミッドの記録、修復。
- ・ピラミッドの各側面の記録、墓の壁画と遺物の記録およびデータベース化。
- ・これまでに、セネジェム・イブ・インティ、クヌム・インティ、アケト・メフ、セネジェム・イブ・メフの修復が完了している。カフラー王の参道の南では、デベヘンやイウン・ミンの墓を含む10墓のクリーニング、修復、復元が実施された。
- ・メンカウラー王とクフ王のピラミッドは、一定期間閉鎖して内部の修復が実施され、クフ王のピラミッドについては、再公開時に1日の入場者数を先着300人に抑える制限が行われるようになった。また、クフ、カフラー、メンカウラーの3基のピラミッドについては、3基のうち毎年1基を保存と修復のために閉鎖するローテーション・システムが導入された。また、近隣の村と遺跡エリアを隔てるフェンスの設置も行われた。

ただし、残された課題として、2000年の国際エジプト学者会議では以下の4点の指摘があった(Hawass 2003: 57)。今後の計画の中で実施されていることが期待される。

- ・ギザには保存修復ラボがない。
- ・レイズナー、ステインドルフ、アブ・バクルの発掘した西墓地と東墓地の墓で報告書未刊行の墓がある。
- ・警備システムが万全ではない。
- ・エジプトの様々な関係団体との協力なくしては教育プログラムが遂行できない。

(2) 1988-2001年の保存管理計画に対する反応

他方で、本書の「4. 遺跡の重要性と保存管理の現状 メンフィス・ネクロポリスの遺跡管理上の問題点について」でも述べられているが、ユネスコの世界遺産の保存管理計画という点では、2004年の世界遺産委員会（蘇州会議）での評価は厳しく、「開発と観光の重要に応えるためのその場その場の対応である」との批判もある²⁾。また、エジプト国内の研究者からも、こうした成果はすべてトップ・ダウンのアプローチで計画、実施されており、政府機関とコンサルティング会社を除き、他の利害関係者の参画がなかったことを強調し、管理計画の形成と実施においては、いかなる関係団体も除外されるべきではなく、特に地元コミュニティの意識向上運動が必要と指摘されている（Shetawy and El Khateeb 2009: 6, 8）。この点について、イギリスでは、計画の段階で管理計画案の公募（Public Consultation）の期間を設けるなど先駆的なアプローチが実行されている例もある³⁾。こうした遺産の保護における社会の参画はブッラ憲章（Burra Charter）でも推奨されており、文化遺産の保存管理の成功のための基本原理であると考えられている⁴⁾。しかしながら、エジプト学の研究者からは、文化財の保存管理はエジプトでは慎重に扱うべき問題であり、「西洋的」な概念が常に当てはまる訳ではなく、教育、社会状況、政府官庁への姿勢がどのようなものであるか考慮されなくてはならないとの指摘もあり（Jones 2008: 106）、それらを更に考慮する必要があると思われる。

(3) その他の動向

マーク・レーナー博士を中心とする古代エジプト調査協会（Ancient Egyptian Research Associates）は、ギザ台地の高精度地図を作成するためのギザ台地マッピング・プロジェクト（Giza Plateau Mapping Project）を実施し、近年では、日本の研究機関とともにレーザー・スキャンニング調査チームを設立して、遺構の三次元計測を実施している⁵⁾。また、同協会では、SCA、アメリカン・リサーチ・センター（American Research Center in Egypt）、アメリカ合衆国国際開発庁（United States Agency for International Development）の協力・支援でエジプト全土から選ばれたSCAの査察官の研修を行う「ギザ・フィールド・スクール」の活動を継続している⁶⁾。さらには、考古学的分析と遺跡保存管理のための新しい技術として地理情報システムを導入するため、エスリ社の技術者を招聘してArcGISを利用し、ギザ台地マッピング・プロジェクトのデータセットの活用とデジタルベースマップの構築を実施している⁷⁾。現在は、図面などの発掘データ、各分野の専門家のデータベースの統合作業を進めており、今後の成果が注目される。

この他にも多方面で、ギザの動産・不動産の遺産に関するアーカイブの動きが見られ、ボストン美術館のギザ・アーカイブでは、過去のギザ台地での調査資料や関連文献のアーカイブとオンライン化を進めている⁸⁾。また、「4. 遺跡の重要性と保存管理の現状 メンフィス・ネクロポリスのインベントリーの現状」でも述べられているが、CULTNATとEAISは、それぞれ地理情報システムを活用したデータベース構築を進行させている⁹⁾。

最後に、日本国政府の有償資金協力（円借款）の供与により、大エジプト博物館の建設事業が決定している。さらに、これに併設する大エジプト博物館保存修復センター（Grand Egyptian Museum Conservation Center）についても、すでに国際協力機構（Japan International Cooperation Agency）が専門家を派遣し、博物館に展示する所蔵品の保存修復技術や収蔵品管理のためのデータベース構築を支援するプロジェクトが始動している。この実現によって、先のサイトマネジメントプランで提案された「考古学的情報と観光客のための施設を備えた社会教育施設」「設備された保存修復研究施設」の必要性が充足されることが期待される。

3. アブ・シール

第5王朝時代のピラミッド群を一般観光客に公開する目的で、SCAによりサフラー王のピラミッド参道および葬祭殿を中心に遺跡整備が進められているが、恒常的な公開には至っていない。アブ・シールのピラミッドの南側の地区では、プラハのチャールズ大学チェコ・エジプト学研究所を中心とするチェコ隊が、1960年頃から発掘調査を実施しており、発掘された古王国時代のマスタバ墓や末期王朝時代のシャフト墓の保存修復、プタハシェプセスのマスタバ墓の修復・復原なども順次進められている (Michael and Bretislav 2000; Sramek and Losos 1990)。また、アブ・シールのピラミッドの南側から北サッカー段丘のエリアー帯には、未発掘の泥煉瓦遺構が多く埋蔵されていることが推測され、埋蔵されている文化遺産の把握するため、2000年以降、衛星画像とリモートセンシング技術を応用した遺跡探査やチェコ隊区域内での地球物理学的な探査およびエスリ社のArcViewを使用し、地理情報システムへの統合やデータベースの作成に着手している (Bárta and Bruna 2005; Bárta et al. 2003; Krivánek and Bárta 2003)。

4. サッカラ

ジョセル王の階段ピラミッドなどの重要な遺跡が数多く存在し、メンフィス・ネクロポリスの中心となるサッカラでは、例えばオランダ隊によるホルエムヘブ墓周辺の保存修復と遺跡管理プロジェクトなど、近年調査隊ごとの個別の遺跡管理が実施されるようになってきた¹⁰⁾。また、近年ではエジプト隊による大々的な階段ピラミッドおよびセラペウムの修復プロジェクトが進行中であり、セラペウムの一般公開も含めた今後の動向が注目される¹¹⁾。

地域全体を対象とした遺跡管理への取り組みとしては、先述した2000年からのイタリア隊による取り組みが挙げられる。“Enhancement of the Organization and Capabilities to Preserve the Cultural Heritage of Egypt”と題されたプロジェクトでは、1. エジプト学、保存、環境、地図などのデータの統合、2. 遺跡の価値、脆弱性、危険因子の分析、3. リスクマップの作成という3つの段階を経て、最終的に今後の遺跡管理計画に資するリスクマップを提示することを目的としている。北サッカラを中心に、地理情報システムの導入と限定的ではあるが、インベントリー、文献目録の作成、コンディションサーベイ、環境計測などを実施し、これらのデータの統合の後に、サッカラのリスクマップを提示し、成果物を刊行している (Ago et al. 2003)¹²⁾。

このプロジェクトの成果を受けて、新たに“*Institutional support to SCA for environmental monitoring and management of cultural heritage sites: applications to Fayoum oasis and North Saqqara Necropolis*”と題したプロジェクトが2004年から2008年の計画で発表されている¹³⁾。このプロジェクトは、先のプロジェクトの第2期にあたり、同じくイタリア政府の協力を得て実施され、すでに設立されている Technical Office for the Institutional Support to the SCA for Environmental Monitoring and Management of Archaeological Sites (TOEMMAS) やエジプトの環境省の Egyptian Environmental Affairs Agency (EEAA) と連携し、以下の2つを主な目的として掲げている。

- ・環境的なストレスを受けている遺跡の保存修復および遺跡区域の社会経済の発展に着目したサッカラの遺跡管理計画の策定。
- ・ファイユーム・オアシスのリスクマップの製作、メディネット・マーディ遺跡の管理計画の策定、ファイユーム・オアシスの地域的資源の価値設定。

5. ダハシュール

ダハシュールは古王国時代の屈折ピラミッド、赤ピラミッド、中王国時代のアメンエムハト2世、センウセレト3世、アメンエムハト3世のピラミッドなどで有名であり、また耕地には古代の景観を想起させるダハシュール湖が存在するなど、自然環境も豊かに残されている。こうした地域の遺跡、自然環境を保護し、さらに地域の経済発展を目的としたプロジェクトがエジプト政府と国際的な協力体制の下、2007年より開始された。

このプロジェクトはSCA、エジプト政府外務省とともに国連開発計画（United Nations Development Programme）、世界観光機関（World Tourism Organization）、国際労働機関（International Labour Organization）、ユネスコなどの協力によって進められており、スペイン政府、国連開発計画によるスペインミレニアム開発目標基金（Millennium Development Goals Fund）を通じての資金援助を受けている。

プロジェクトでは遺跡の保存整備を行い、これまでに公開されていない遺跡を観光客に一般公開することを主な目的としており、特にダハシュールの屈折ピラミッドや中王国時代のピラミッドのいくつかを近年公開することを目指しているとのことである。更にこのプロジェクトでは、世界遺産を活用した地域開発が掲げられている点が特徴的である。地域の経済活性化のための観光事業とともに、周辺地域の自然環境の保護および教育のプログラムなども計画されている¹⁴⁾。

6. 現状のまとめと今後の課題

本稿では、今後の計画策定に向けて、現在における遺跡保存管理を把握するため、メンフィス・ネクロポリスの遺跡保存管理の現状についてまとめた。エジプト各地の遺跡においてサイトマネジメントの取り組みが始まっているが¹⁵⁾、メンフィス・ネクロポリスの中では特に先駆的に保存管理計画を策定して着手してきているのがギザ遺跡である。今後、計画の成果に関しての検証が必要となるであろう。また近年では調査隊ごとの個別の遺跡管理が進むものの、地域全体を視野に入れた保存管理計画はまだまだ少ない。ギザ遺跡における例のように、他遺跡においても、地域全体の長期的な管理計画策定および実施が望まれる。

註

- 1) その他、以下に情報が記載されている (<http://www.guardians.net/hawass/conservation.htm>; <http://www.guardians.net/hawass/conservation2.htm>; <http://www.drhawass.com/blog/site-management-egypt>)。
- 2) 本書「4. 遺跡の重要性と保存管理の現状 メンフィス・ネクロポリスの遺跡管理上の問題点について」を参照。
- 3) 例えば、イギリスのストーンヘンジでは、2008年にホームページ上で保存管理計画書の草稿や小冊子 Future of Stonehenge, Public Consultation を作成して公開し、一定期間を設定して、公募を実施している (<http://www.stonehengeconsultation.org/>)。
- 4) ブッラ憲章についてはオーストラリア・イコモスのホームページを参照 (<http://australia.icomos.org/publications/charters/>)。
- 5) ギザ台地マッピング・プロジェクトについては、http://www.aeraweb.org/gpmp_home.asp および <http://oi.uchicago.edu/research/projects/giz/> を参照。三次元計測については、亀井他 2009 を参照。
- 6) フィールド・スクールの詳細は古代エジプト調査協会のホームページ (http://www.aeraweb.org/field_schools.asp)、アメリカン・リサーチ・センターのホームページ (<http://www.arce.org/main/training/fieldschools>)、両組織の定期刊行物 AERAGRAM や Bulletin of the American Research Center などに最新情報が報じられている。
- 7) 地理情報システムの導入については、http://www.aeraweb.org/spec_GIS.asp を参照。
- 8) ポストン美術館のギザ・アーカイブ・プロジェクトの詳細については以下のホームページを参照 (<http://www.gizapyramids.org/code/emuseum.asp?newpage=about>)。

- 9) 現段階では、各国調査隊やデータを集積する各機関の間に情報共有のシステムが確立していない（青木、高宮 2008）。
- 10) 簡易的な報告がオランダ隊のホームページに掲載されている（<http://www.saqqara.nl/excavations/the-dutch-excavations/conservation-and-site-management-project>）。
- 11) SCA によるサッカラでの修復プロジェクトの動向については、以下を参照（<http://www.drhawass.com/blog/saving-step-pyramid>; <http://www.drhawass.com/blog/restoring-saqqara>; <http://www.drhawass.com/blog/saving-serapeum>; <http://www.drhawass.com/blog/climate-change-and-conservation-egypt>）。
- 12) プロジェクトに関するホームページは以下（<http://www.saqqariskmap.org/>）。
- 13) 第2 フェーズについては、http://www.eiecop.org/ambiente2/projects_2/cultheritage_2.htm を参照。
- 14) 詳細については以下を参照（<http://sdnhq.undp.org/opas/en/proposals/suitable/278>）。
- 15) 例えば、アメリカ隊による王家の谷のサイトマネジメントプランなどが有名である（Weeks and Hetherington 2006）。